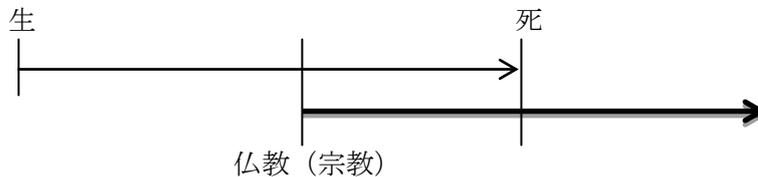


法然における凡夫救済の原理

1、宗教 → 人としての最大関心事《死》の超克・超越 = 仏教



およそ人間は、自分の「死」について無関心ではられない。「生」を自覚すれば「生」に執著し「死」を意識し、「死」ですべてが終わることに気づき、「死」の意味、「生」の意味を探る。そして宗教、仏教は人間に「死」の超克・超越をもたらした。

法然浄土教においては、現実存在としての「私」を見据え、絶望(苦悩)に苛まれる「私」=「凡夫」=「人間」が念仏により希望(自信)を得、阿弥陀仏に救済(確信)されゆく過程を確認できる。

2、絶望(苦悩) → 希望(自信) → 救済(確信)

しかるにわかこの身は戒行にをいて一戒をもたもたす、禅定にをいて一もこれをえす。人師尺して、尸羅清浄ならされは、三昧現前せずといへり。(中略) 無漏の正智なによりてかをこらんや。若、無漏の智剣なくは、いかてか悪業煩惱のきつなをたたんや。悪業煩惱のきつなをたたすは、なんそ生死繫縛の身を解脱することをえんや。かなしきかなかなしきかな、いかかせんいかかせん。ここに我等ときはすてに戒定恵の三学の器にあらず。この三学のほかに我心に相応する法門ありや、我身に堪たる修行やあると、よろつの智者にもとめ、諸の学者にとふらひしに、をしふるに人もなく、しめす輩もなし。然間、なけきなけき経蔵にいりかなしみかなしみ聖教にむかひて、手、自、ひらきみしに、善導和尚の観経の疏の、一心専念弥陀名号 行住坐臥不問時節久近 念々不捨者 是名正定之業順彼仏願故といふ文を見得てのち、我等かことくの無智の身は、偏にこの文をあふき、専、このことほりをたのみて、念々不捨の称名を修して決定往生の業因に備ふへし(『法然上人行状絵図』第六卷)

3、浄土教思想の真実性を立証した法然の生きざま(三昧発得→生死を超越)

また一人の弟子に対して、一向専修の義をのべ給に、御弟子西阿彌陀佛推参して、かくのごとくの御義ゆめゆめ有べからず候、をのをの御返事を申給べからずと申ければ、上人のたまはく、汝経釈の文を見ずやと。西阿申さく、経釈の文はしかりといへども、世間の機嫌を存するばかりなりと。上人又の給はく、われたとひ死刑にをこなはるとも、この事ははずばあるべからずと、至誠のいろもとも切なり。見たてまつる人、みな涙をぞおとしける。(『法然上人行状絵図』三十三)

この引用に、「死」を超克し、生死をはるかに超越し、阿弥陀仏によって救済された法然の姿を確認したい。それはまさに人間が真実なる宗教により救済されることを意味する。法然においては、人間を凡夫と定義付けし、煩惱を持ち守るべき戒が保てず禅定がままならない、およそ仏教から見捨てられる存在という位置づけをなす。その自覚こそが阿弥陀仏の救済に与れる原理となる。

キーワード：凡夫 三学非器 三昧発得